

令和2年度用『新詳地理B』（p.266～267）のお詫びと訂正

この度弊社では、令和2年度用『新詳地理B』において、客観情勢の変更に伴い p.266～267 について修正を行いました。

しかし、教科書が皆様の手元に届いてから、修正後のデータで印刷された教科書と修正前のデータで印刷された教科書が混在していることが、判明しました。ご迷惑をおかけし、誠に申し訳ありません。以下に訂正箇所を明示しました。修正前のデータで印刷された教科書かどうかをご確認ください。

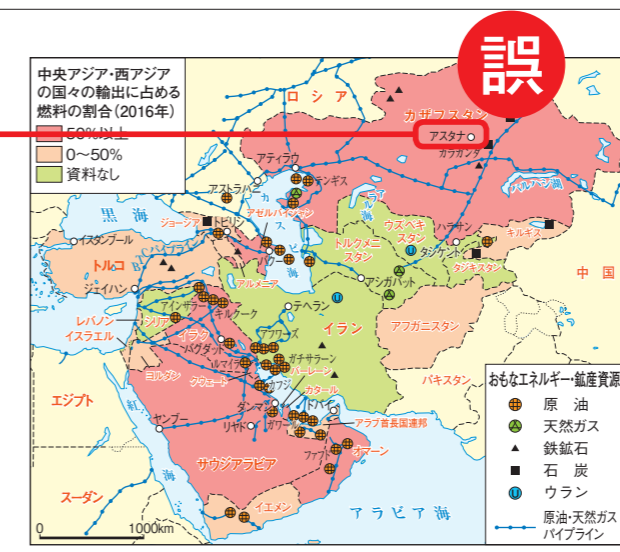
正
ヌルスルタン

正
97年の遷都の際にアスタナと改名され、さらに2019年にヌルスルタンと改名された。首都の都市計画案は日本人建築家が担当した。

正
ヌルスルタン



▲① イスタンブールの街なみ(トルコ, 2010年撮影) イスタンブールは4世紀ごろから東西交易の要地として繁栄した。ビザンツ帝国時代にはアヤソフィアに代表されるキリスト教文化が、オスマン帝国時代にはブルーモスクに代表されるイスラーム文化が栄えた。
▲② アスタナの街なみ(カザフスタン, 2012年撮影) ソ連時代はツェリノグラード(アクモリンスク)とよばれていたが、1991年の独立時にアクモラ、



▲① 石油精製所(サウジアラビア、リヤド近郊)
 ▲② 西アジアと中央アジアの資源(World Development Indicators 2017, ほか)
 読図 パイプラインのルートに着目しよう。

リード
乾燥地域が多い西アジア・中央アジアの都市は、どのような経緯で発達してきたのか、類似点・相違点に注意してとらえていこう。

プラス
都市の人々
交易を軸に都市が発展したことは、人々の生活習慣や価値観にも反映されている。伝統的な市場であるバザール(アラビア語ではスーク)には、衣類・食器・農機具・食料品・香料などを売る店が集まっている。そこでは、買い手と売り手の活発なやりとりを通じた売買や、さまざまな情報交換も行われる。街かどにはイスラームのモスクがあり、金曜日にはムスリムは店を休めて礼拝に訪れる。また、外国の人々が大量に訪れてきたことから、都市住民は異文化に対して開放的であり、客人に対するおもてなしを大切にしている文化が根づいている。

Ⅱ ダマスカスを首都としたウマイヤ朝(661～750年)、バグダッドを首都としたアッバース朝(750～1258年)。

チェック
西アジアと中央アジアの都市の相違点について、いくつか例をあげて説明しよう。

2 交易を軸に発達した都市

東西交易の要衝 乾燥した地域が多い西アジアや中央アジアでは、人間は限られた場所にしか定住することができない。そのため、オアシスのように水の得られる場所に都市が成立した。遊牧と灌漑農業が発達した西アジアや中央アジアの人々は、古くから商業とその交易の場として都市を発達させた。これらの都市の多くは、中国とヨーロッパを結ぶシルクロードをはじめとした陸上や海上の東西交易路の要衝として重要な役割を果たした。

西アジアのおもな都市 西アジアでは、ティグリス川やユーフラテス川のような大河川の流域に発達したバグダッド、レバノン山脈から流れる河川の流域に発達したダマスカスなどのように、主要な都市は河川もしくはオアシスの周辺に成立した。また、古代文明はもとより、古代から中世にかけてのイスラーム王朝の時代にも都市中心の文明が発達した。

中央アジアのおもな都市 中央アジアでも、ブハラやサマルカンドなどの都市は、シルクロードの拠点として発達しただけでなく、イスラーム文化の中心となった。現在も多くのモスク(イスラームの礼拝堂)やマドラサなどがある。

一方、カザフスタンの首都アスタナのように、1990年代にソ連から独立したのちに、行政上の中心として新たに建設された都市も発展を続けている。中央アジア諸国の首都は、いずれもソ連時代に政治の中心としてつくられた。独立後は、ロシアの影響をきらって独自の都市を建設しようとする動きが出ているが、老朽化した都市の基盤を整備するには、ばく大な費用がかかるなどの課題も多い。

3 豊かな資源と人々の生活

豊かな産産・エネルギー資源 西アジアと中央アジアは、原油や天然ガスなどの資源に恵まれた地域である。サウジアラビアやイランなど、ペルシア湾岸の国々では1930年代に石油の採掘が始まり、世界の主要な石油産出地域となった。また、カスピ海周辺にも多くの有望な油田やガス田があり、アゼルバイジャンやカザフスタン・トルクメニスタンなどが開発にしのぎを削っている。

石油資源に依存する西アジア 西アジアでは、石油の採掘が始まると先進国がこぞって資源の争奪に参加し、紛争の原因となった。1970年代に入ると、産油国が原油価格を決定する主導権をにぎるようになったことから、西アジアの国々は急速に豊かになった。とくに1973年に起こった第1次石油危機は、原油価格の高騰をもたらして非産油国の経済に大きな打撃を与え、産油国には巨額の富をもたらした。サウジアラビアやクウェートでは、石油資源をもとに石油化学工業が発達した。しかし、これらの国にとっては、自動車や機械製品などは石油収入による富で外国から輸入するほうが合理的だったため、製造業の発達は遅れがちだった。近年は、アラブ首長国連邦でのリゾート開発やバーレーンでの金融センターの育成などにより、石油収入依存からの脱却をはかるため、観光開発など、

一方、石油が世界争や戦争は国際社会側ではイラン・イ

リード
西アジアと中央アジアは図②のように石油資源に恵まれている。石油資源がそれぞれの地域に与えた影響を、歴史的な流れもふまえて比較していこう。

リンク
エネルギーのかねめである石油(p.121)
資源ナショナリズムと石油をめぐる動き(p.129)



修正前の p.266～267